



DIE TANZENDE BILDER

THE ESSENCE OF
TAGUCHI ART COLLECTION

CURATED BY

TSUTOMU IKEUCHI [RÖNTGENWERKE AG]

絵画は踊る

ータグチ・アートコレクションのエッセンス

8.17.SAT.-25.SUN./ 8.27.TUE.-9.1.SUN.2013

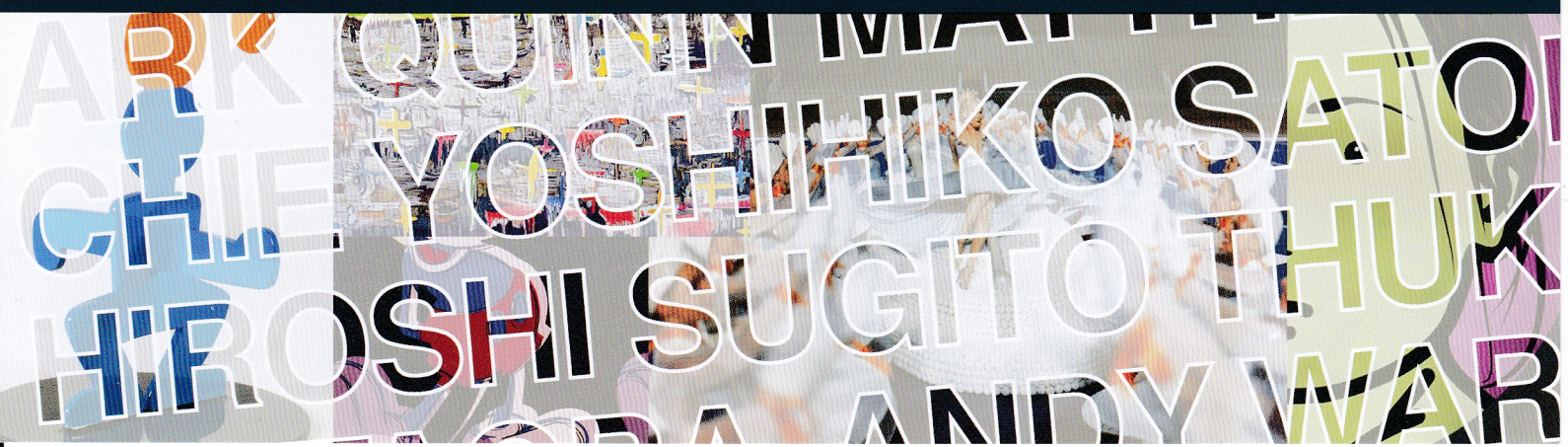
ATTN.:CLOSED ON 8.26.MON. EXHIBITION WILL BE CHANGED PARTLY.

SPIRAL GARDEN

[SPIRAL 1F] 5-6-23 MINAMI-AOYAMA MINATO-KU TOKYO JAPAN

INFORMATION: 080-5904-1198 [TAGUCHI]

SPONSORED BY



「絵画は踊る」 開催に寄せて

作品としてのアートは人に見てもらわなければならないと思います。見てもらうことで人々とのコミュニケーションが成立し作品として機能するのです。だから集めるだけでなく貴重な作品を多くの方にご覧いただける機会を作りたいと常に考えていました。

その願いがスパイラルという素晴らしい空間で叶えられることを心から感謝します。コレクションとコラボレーションするという難しい取り組みにチャレンジしてくれた池内氏の勇氣によって、作品たちは空間と共鳴し、新たな魅力を発揮してくれるでしょう。閉鎖空間から飛び出した作品たちの「踊る」姿を、自由なスタイルで楽しんでいただければ幸いです。

タグチ・アートコレクション 田口弘

絵画を踊らせるまで

一定の拘束性はあるにしろ、言葉を前提にしない形で既に選択の済んだ作品群というある一定の枠の中で、ある記号を見出し、そこに沿うべき言葉を作り出していく、この作業が後半に向かって相応にスリリングになっていった事は告白しておいた方が良いでしょう。

さらに、スパイラルという会場の持つ、非常にオープンな構造と特性は、つついテーマ展が持ち合わせてしまう閉鎖性をことごとく打ち砕いてしまう。

こうした諸条件から作品の選択に関してはビジュアルな印象から得られる緩やかな統一性をその出発点とする事になった。作業はまず漠然とカタログをながめ、延々と付箋紙に貼付け、付け替え、発行者には大変失礼ながらページを分解し、スキャンし、会場の図面の中に並べ、ためつすがめつ、という、版型は決まっているのに終結の無い編集作業といった様相を呈した。

この子供の切り絵のような作業（事実子供の目線になる事で得られる事はとても多い）の中で自分の中に生成されていく印象といったものを分析していく事で、今回の展覧会コンセプトを組み上げていく事となった。

さて、印象の分析から構築されるコンセプトである。実のところこの作業は決して困難ではなかった。

目玉を動かすことによって得られる楽しさ、主体を換えれば作品の「動きの持つ楽しさ」これこそがタグチコレクションのエッセンスである。「動きの持つ楽しさ」をストレートに伝える。非常に単純ながら、これがこの展覧会のコンセプトである。

この「動きの持つ楽しさ」を象徴する言葉を作品のタイトルの中に散見する事ができた。
桑久保徹「ダンス・レッスン」
ジュリアン・オビー「シャヌーザ・ポール・ダンサー」
杉戸洋「ダンシング・マン」

「ダンス」

「動きの持つ楽しさ」を表現するのにこれほどふさわしい言葉があるだろうか。会場であるスパイラル奥の「アトリウム」と呼ばれる円形の空間もまた、「ダンス」をイメージするにふさわしい。この空間で絵画にダンスを・・・。

こうしてタイトルであり、テーマであり、コンセプトを象徴する言葉、「絵画は踊る」が生まれた。

ウィーン会議は、フランス革命とナポレオン戦争終結後のヨーロッパの秩序再建と領土分割を目的として、1814年9月1日から開催された。1792年より以前の状態に戻す正統主義を原則としたが、各国の利害が衝突して数カ月を経ても遅々として進捗せず、「会議は踊る、されと進まず」と評された。

Wikipedia より

「絵画は踊る」の引用の原点である「会議は踊る」。この政治的には不面目なウィーン会議は、その半面ウィーンの社交界を通じて文化に大きな隆盛を与えた、という。社会的にエポックな状況が、藝術に影響を与える。こうした事は言説を骨格として構築されるべきコンテンポラリーアートのスタンダードと呼応していると言わざるを得ない。

さらに社会との具体的なアプローチともなれば、**ピーター・ハリー**のような大局から社会の構造を抽象化する作業や、**アンディー・ウォーホル**の様に社会に起きている現象の抽出から作品を生み出しているケース。また**トゥークラル・アンド・タグラ**のように具体的なイメージによって新しい世界を創造してしまっているビジュアル、**キース・ヘリング**のように社会に介入してしまう作品。こうして社会とコンテンポラリーアートとがリンクしていることは今更言うまでもない事だろう。

ビジュアルにかなり具体的に「ダンス」を表現している**マシュー・バーニー**とこれに呼応する形での**ジェレミー・ディッキンソン**、これら円舞のモチーフはスパイラルの象徴的な構造であるアトリウムと呼応する。さらに、この楕円形に呼応する**ジュリアン・オビー**、**石川結介**を配した。こうしたアンサンブル（元々は音楽やダンスの用語である）はシンメトリカルな配置と相まって、引きの大きいスパイラルにおいて観客を楽しませる事となる。

他方ウィーンでの会議、といったある種クラシカルなファンタジーもコレクションからユニークな引用をすることが出来た。時代的にはズレるものの、ハプスブルクの女王、マリア・テレザをモチーフとした**ジュリアン・オビー**、古城のタペストリを彷彿させる**アンジェロ・フィロメーノ**がこれにあたる。

ジン・メイヤーソン、**エミリオ・ベレス**はコンセプトのブースターである。純粋な抽象性の提示は「動きと楽しさ」をストレートに増強していく。

「ダンス」には音楽が無くてはならない。明るく高い場所から**マシュー・リッチー**が奏でる複雑なクラシック、**インカ・エッセンハイ**、**カンノサカン**にはその整理された自由な線にジャズを、**村上隆**、**ダミアン・ハースト**の反復性は現代のコンピュータ生成によるテクノ・ミュージックを象徴させる。アトリウムには**佐藤好彦**、**ロイ・リキテンスタイン**によってロックを中心としたポップミュージック全般をシンボライズさせる。さらにその奥に聳える**ライアン・マクギネス**は現代における音楽の最終形態であらうトランス・ミュージックのトーテムである。

そして全体から少し離れた場所に配置された**マーク・クイン**、**アルトゥーロ・ヘレラ**の作品は、言わばこの全体の後見人、といった位置づけとなる。

4つのポイント（エスプラナード、ギャラリー、アトリウム、カフェ奥）に分けられた会場にもそれぞれの意味を設定した。

エントランスから右手、エスプラナードと呼ばれる高所には、世界の連観が象徴される。

ギャラリーは、むしろ古い意味での画廊のメタファ。広間へと通じる通路でありながら、オーナーの思いを深く告げられる場所。

あまり展示に使われる事のないカフェ奥には、作品の持つ力を持って、後見の場とした。

そして、エントランスから最も遠いアトリウムでは正に今ここで絵画たちが踊っている、という姿を見ることが出来る。壁ではなく、スタンドと吊り下げによるランダムに配置された作品の中では、観客もまた絵画とのダンスを楽しむのである。

視覚によって脳内に響き渡る音楽と、脳内に躍動する肉体。いずれもが具体的な姿と交錯する抽象性をもって観客を揺さぶる「動きの持つ楽しさ」。

「絵画は踊る」は、そんな展覧会を目標としている。

(**太字**は出展作家名)

「絵画は踊る」キュレーター 池内務 [レントゲンヴェルケ]

2013/8/17[土]-25[日] ,8/27[火]-9/1[日]

※8月26日(月)は、展示作品入替のため、クローズいたします。

11:00-20:00 入場無料

会場:スパイラルガーデン [スパイラル1F]



東京都港区南青山5-6-23 tel.03-3498-1171[代表] http://www.spiral.co.jp
東京メトロ表参道駅[銀座線・千代田線・半蔵門線]B1/B3出口すぐ

絵画は踊る

ータグチ・アートコレクションのエッセンス

主催：タグチ・アートコレクション
協賛：UBS銀行

企画制作：「絵画は踊る」実行委員会
キュレーター：池内務
コーディネイター：アート・オフィス・シオバラ
出展作家協力：株式会社レントゲンヴェルケ
会場協力：株式会社ワコールアートセンター
お問い合わせ：080-5904-1198 [田口]